

## 巴金の作品世界『春』について

中 村 俊 也

### (序)

「春」は出立の季節、蘇生の時である。しかし、それは順境において人を置くことを約束しない。絶望の中に困難に抗しつつ新しい局面を拓かなければならない人にとって、それゆえに、「春」はまばゆく、遠い憧憬である。巴金（1904～ ）は、1938年2月28日の南国版序文において、著作時の境遇をしいて笑まいを保ちつつ、「孤島」<sup>1</sup>（大日本帝国の圧倒的軍事力、攻勢の中に自立をかううじてする極小世界、上海の租界）で苦悶の日々を過ごしていた、と述べ、抗日、抗戦の中に在った中国の青年子女についてこの作品を提供する、と宣言する。

「私は暗いうっとおしい気分の中で相当な悪夢を見た。この小説にもそのような悪夢の影が存する。私は歴史を書いている、時代は的確に前進しようとしている。だが、青年子女のあがきは依然として存在している。私はこれらの人々のためにこの小説を書くのだ。」（序 本文 10～11行）

巴金は、目前にしている時代の相をどう捉えていたか。当時の若い人々、中国の新世代のみではなく、後代、今日の私達にも達するメッセージを色濃くとどめて、作品は私達を多く魅了する。ここを推究することが、今日の読者の謎解きの楽しみでもある。

「私は『春』を書き終え、はじめて万年筆を擱いた、やや疲労を覚えて我に返り周囲を見渡した、すると春風が窓から入りこんできて軽く私の頬を撫でる。不思議にけだるい感じがずっと消える。春がもうきている、と

---

<sup>1</sup> 「いわゆる『孤島』とは、日本が占領している区域中、ただ上海租界だけはまるで小島のように占領されている区域に残った、だから、中国人はそれを『孤島』と呼んだ。もともと欧米列強の侵略の象徴であった租界が、日中戦争の勃発につれて、中国人にとって一つの『自由地域』に変じた、これは諷刺の意味を有した歴史の変遷と言わざるを得ない。（中略）（しかし、ここは、）日本の傀儡政権の頭目汪精衛が上海に移ってから、日本軍と汪政権が血腥い抗日反汪の活動鎮圧の箇所、租界の中で恐怖政治が横行したのである。」（山口 守 坂井 洋著『巴金的世界』1995年 北京東方出版社の中「巴金の上海」90頁 関連部分訳出）

思えた。私は淑英（シューイン）の言葉を思い出した、春ってみんなのものなのよ、と。」（序 本文 12～13 行）

巴金の作品の方も、人当たりがよく、誰にも理解しやすく、人の苦境に優しい、春風のような、しかし、底の深奥に存する思想の根元に切迫しなければ、研究として意味を成さない、巴金の一読者である私も終生、巴金に甘えている怠惰な読者に堕し切っているわけにゆくまい。巴金の温容の底に潜む骨太の精神に挑む、それは、当然、中国の知識人理解につながって行く。把え難い春風の相、私は『春』を否、巴金の作品自体、全体をばそうした気持ちを抱きつつ読み進めようとしている。

『春』には他の作品同様さまざまな人物が登場する。『家』から続く巴金が与えている宿題として、これらの人物の相互関係を整理しつつ、全体の筋書きを見失わず読み進めるのは簡単なようで容易でない。『家』には、旧軍閥の時代が色濃く表出しており、登場人物全体として、そうした制約の中で動いている、と考えられる。しかし、『春』となると、著作時を考慮すると、人物は旧時代の中に居らされているとはいえ、束縛の様子は一変し、大革命（1925 年）、北伐（1927 年）、国共分裂（1927 年～1935 年）、同合作（1936 年）へと大進展し、旧時代は形骸化していた。

『春』は、女性主人公を中心としてストーリーを整理すると、次のように標題が付せられる。Ⅰ 自縛、Ⅱ 蹉跌、Ⅲ 先達、Ⅳ 覚醒、Ⅴ 出立、である。一見して本篇を見て了解されるように、これは女性主人公、淑英が大家族を離脱するのであり脱走ではない。したがって彼女は、周囲の状況に応じて変貌し、やがて新生活へと出立してゆくのであり、誰も、彼女を追撃してこない。追ってくるとすれば、それは、従来の大家族の統領によって営まれる生産形態の安泰であるという彼女における先行観念が彼女に迫りすがってくるのである。つまり、彼女は初めから呪縛にあったように旧伝統に完全に制約されている。しかし、安泰をみた旧套は、この作品が書かれた 1938 年当時、変質し、腐食しているのである。だから、大家族は新時代に孤立している。外から新しい生活の様子が絶えず姿を表わす。誰もが十全の生を今まで通り求めようとして焦慮する。全体が大動転している、途中で挫折し、夭折者が相次ぐ。これは、この邸の人々に特別に見舞う現象ではない。そのことは、中国社会のこの時代の転回を振り返れば自明のことである。近辺の者の蹉跌は眼を覆うほどである。こうしたなか、時代の先駆へと自らを追いやる青春群像が目立つ。この女性主人公もそうしたなかの一人である。これ

らの人々の生の中に確実に彼女は存している。その点で、何ら、彼女は憐憫の対象などではない。つまり、こうした人々の置かれた環境はひとしなみのものであり、だから、先達の一人、琴（チン）は、「春って、みんなのものですわ。」と気づく。やがて、主人公は、眠り姫のように自ら目覚める。しかし、そこには、世界的規模の壮大なシーン（それは実測として計測されるものではない）の中で、新しい時代の人物の動力、リアリティをつかむ。彼女はそうした理想に憬がれ出立してゆく。こういうふうに、『春』を把えるとき、それは、殻を打ち破れずに膠着し切っている 21 世紀の人々に何物かを示唆するものである、と読み取ることも可能である。したがって、私は、巴金の言葉によって示される一切を一々に計測することを全くしない。それは、『春の小川』が渋谷の街の片隅にあるのだ、と考証し、そこを尋ねて安心するのとちがう。春の到来時、耳に心地よく響くせせらぎは、到る所に確認し得て、こうした大切な人々を囲繞する環境の保全をするよう、皆を勇気づける今日の状況を心に銘ずる必要性こそ大切である、のと同じである。比較文化とは、こうした行き方なのであり、あちこちから絶えず、虫眼鏡をもって、古地図をひっくり返す所作に終始するのと違う。極言しよう、巴金の作品の中にある湖水は、ザバイカルでいいのではないのか。このように考えたとき、そこを舟で行く、召使の翠環（ツウエイホワン）は、物語の中のカササギとなって、読者に微笑んでくれる。私は、巴金の行文から自由な情景を期待し吸収したいのだ。

## I 自縛

『春』は、主人公、淑英（シュウエイン）が、高家という大家族を離脱する、つまり、四川省から大都会へ上海へと出立することをストーリーの骨子としている。長篇を一通り読み、了解されるのは、これは、あくまで、出立であり、脱出ではない、ということである。淑英を追跡し、迫撃し、彼女に迫切る追手の影が、全く稀薄であるからである。それは、すでに、『家』における覺慧（ジュエイホエイ）の同コースでの離脱でも同様である。内外の離脱の導管が形成されたとき、事は外部へ通じる湖水を迂る舟の漕ぎ手次第、能力次第で、むしろ順調に運ぶ。この点に着目せずに、激流三部作を読了した、と言い切るのは、早計というものである。

『春』は 1938 年に書かれた。中日戦争開始二年目、国共の合作成立期である。中国は、強大な大日本帝国の軍隊を迎え撃つべく、必要に応じ青年の

みならず子女までも戦争に動員しなければならなかった。しかも、近代戦には、有能とされる人材を抗日戦という目標に絞り込み投入しなければならなくなっているはずである。中国も当面、拠点となる都市防衛に人々は結集してゆく。もはや軍閥を基底で支えた大家族の子弟といえども、国民国家防衛の一翼を担い中央の呼号に応ずべき状況に在った。良家良俗の土地地主の子弟も外へ行く必然性は熟成していた。そうした青年子女を引き留めるものは何か。すでに大家族の強固な紐帯は弛みつつあった。そう考えるのが至当であろう。『春』の中の主人公淑英はいつでもこうした束縛を振り切れる位置にあった。逃れきれないのは旧套、旧伝統でしか生きられない人々であり、むしろ旧伝統にそうした人々は殉じてゆかねばならなかったわけである。加速する世の進歩は、旧伝統の領袖にも一刻の安住も許さないし、この人々は必死に己が内の守るべき遺産も振り捨てて、彼らとして、次の段階へと進まねばいけなかったわけである。この小説に登場する苦慮の奈辺に在るかを読み取ることをせずに、巴金のリアリズムは突き止め得まい。巴金は類い稀なる行文、筆力、構成によってそれを示している。それはカモフラージュに執心することはない。そこを逐一眺めてゆくこととする。

まず、束縛といえば、形態上身体を邸に繋ぎ止められている如く、身体を旧伝統と不可分の形式に作ってしまっている、淑貞（シュウジエン）が挙げられる。彼女に同情の眼を注ぐ姉妹の心に存するのは、すでに作品を生じている作家巴金の新時代の雰囲気<sup>どんす</sup>に囲まれている人々の観念から発した感情、あわれみである。

『琴（チン）姉さん、琴姉さん…』

梅林の辺りから歩いてきて、こう呼んで、琴の言葉をさえぎって、三人（＝琴、淑英（シュウイーイン）、淑華（シュウホワ））をはっとさせしばし笑いを止めるようにしたのは、誰であろう彼女らの四妹（スウメイ）〔＝四番目の妹〕淑貞である。青い緞子<sup>どんす</sup>に花模様の刺繍がある靴を穿いた小さな足を懸命に動かして近寄って来るのであった。傍らには淑華の家に居る女召使の綺霞（チーシシア）がおり、手に籠を提げている。中には茶壺、茶碗、瓜子（グワヅウー）、落花生といった物が入っている。十四歳の女子が歩く様子を見ると、辛そうで、皆五体満足ならと残念がる、そうした眼差しで彼女を見る。琴が淑貞に歩みより迎える。淑貞は琴の身体の側に近づくと腕を取り、琴をいとおしんで離そうとしない。（第一部 一章 8 頁 10～14 行）

足を不自由にしている淑貞は、侍女にかしづかれなくては行動をとれぬ姫のようだ。しかし、新しい時代の息吹に慣れていない女性に変わりはない。だから、新時代の知を積極的に吸収し、自己を造りつつある、才女、琴が頼りである。琴へ期待をかけるのは、アヘンの吸引を嗜む旧套を支える老婦人も同様である。眼の不自由な音楽師の導入役に彼女を指名するのは、沈（シエン）氏である。ここに新旧の間の交流が見られる。巴金の巧まざる用意だ。

「眼の见えない音楽師が邸に招かれ所定の位置に座る。戯曲の台本、摺り本を手にして、沈氏の方を望み、微笑む。沈氏がすぐに言う。

『それでは琴さんに指定してもらおうね。（＝当権者の女性も彼女を認めている）』

『私、全然慣れてないんです。やはり、五舅母（ウージュウムウー）[＝五番目のおじの母、沈氏を指す]が決められるのがよいと思います。』

『琴さん、あなた、すぐに曲名を示してみてよ。』沈氏は催促する。

（第一部 五章 79頁 7～15行）

行懸上、旧伝統にまつわってしまった人々も、新時代になればその息吹に曝され、そこへ必死に入ろうとする。しかし、彼らは順調にそこへ入ることができない。新しい才能ある人を立てようとする。

## II 蹉跎

人々は春が到来すれば相応に行動をなそうと支度する。春は当面する皆のものである。自由に新生を目指せばよいわけである。しかし、そこへ心が焦れば焦るほど、意欲が鎖ざされ、阻止され、果ては倒壊させられる局面が待ち受ける。若い女性、十代半ばの娘にとって、そこは教養に慣れ、自分の力を試みたい、チャンスに挑もうとする時である。

しかし、親族にとって、とりわけ旧套を保持する当権者は一族を血縁によって増殖し、力を伸張してゆく契機として、若い娘の婚姻を契機にして政治経済の協力関係を築き上げたい、こうした意欲に満ちている。

『春』において、極立った対比をなすのは、とりわけ、人生の出発の時期において、周囲によって固められたコースを選び、躓いてしまう蕙（ホエイ）と、最後まで自己の希望とする境に自分を推し出してゆけた淑英の、二人の典型的な存在である。

親族の年長の女性から自らの婚姻話を聞かされ、蕙と淑英は双方共に不安を感じる。淑英にとっては、あとに続く位置に居る以上うかうかしていられ

ない、という思いがある。蕙は戦慄する。彼女の変化を察した継母、周（ジョウ）氏は、経過を明白にし、早く諦めて運命に身を委ねてもらおうべく説得を始める。婚姻話の背景を入念に説くことにより、蕙の納得を得ようとする。話は、ある個人の恣意に決したものではなく、長期の周囲、伝統の条件によって熟成してきたものである、あらがいてないものであることが説かれ始める。蕙は年長者の説明に次第に重苦しくなってくる前途を見つめ、旧套に引き込まれてゆく。後に続く身の淑英も心穏やかではない。

『このことは、母さん [=周氏の実母、周老太々くジョウラオタイタイ>] がここに持ち出してあれこれしようとしてどうするのさ。生米<sup>なまごめ</sup>はもう炊き上がってるのよ、大兄さん [=覚新くジュエシイン>の叔父達を周氏から呼んだ言い方] が婚姻話を決めているんで、当然それは蕙の生涯の幸福を思つてのことなんだよ。（＝思いやりであつて強制ではないという論理）』

『そうだね。婚姻のことは運命の内に決まっている。これには少しの間違いも有り得ないのさ（＝命定論、決定論）。お婆様も安心していいということさ。』

沈氏は追従笑いをする。

『今になつても安心であるとか、不安であるとか言えたものかね。この人が言ってくれたことが本当さ。ご飯がもう炊き上がってしまったんだから。私も他の仕方など考えようもないよ。蕙が早く嫁いで幸せな日を送つて欲しいね。』

周老太々は苦笑して言う。

蕙はみんな（女召使や娘つ子もその中に入る）がこっそり注いでいる眼の光を見ると面白くない、懸命にそうした話が聞こえない振りをして、頭をぐっと低くして、両の眼で自分の膝頭を眺め、両手で少し衣服<sup>かど</sup>の角をめくる。彼女はどうしようもなく、きちんと、そこに座っているしかない、それは（すでに）新婦のようなはにかみを備えている。妹の芸（ウイン）はその様子を見ると、心中やや不安になり、すぐに聞こえない振りをする、ひたすら小声で淑華、淑英姉妹と何か話をする。

淑英は、この全てを目の当たりにし、同情心を掻き立てられた。耐え切れなくなり、口を母親（＝張氏 [ジャンシー]）の耳もとに近づけて二言、三言。張氏はそれを聴きつつ、うなづき、それから蕙の方を一眼見て、改めて微笑みつつ、周老太々に次のように勧める。

『お婆様、私の娘たちを、蕙さん、芸さんのお供にして花園の中を散歩してもらってはどうでしょうね。この姉妹たち（＝蕙、芸、淑英、淑華）、ここ数年顔を合わせてないでしょう、きっと話すことが沢山あるはずでしょうに。このように、あの人達を部屋に閉じ込めているのは可哀想じゃございません？。』（第一部 第六章 91頁 3～16行）

旧套は相応に当権者のリードと、それに従順である人々との行為行動によってしつらえられている。張氏は、ここで鬱屈した雰囲気を解き、ひとまず風通しをよくする調停者の役割を買って出ている。新旧いずれのシステムに在っても、こうして潤滑油を欠いては、事は行き詰まること必定である。のちのことになるが、外に向けて出立できるのも、こうした有能な慈母の存在ゆえであると思い知るとき、巴金の心憎い首尾照応への技巧が知られる。

淑英と、婚姻に対し岐路に立つ蕙は、運命の日の近づくのをただ待つのみで、ひたすらに旧伝統に従う人物として描かれる。淑華はこうした身内の食い違ったコースに対して遠慮のない論評を下すが、彼女は巴金の設定したコメンテーターとして、その立場は、当時の進歩的青年子女の代弁人として終始している。

『『本当に恨めしいこと。どうして女性はお嫁に行かなきゃいけないの。世界はこんなに大きいのに、一方的に私達女性をひどい目に合わすなんて。お天道様は本当に不公平だわ。』

淑華は歯ざしりして憤おる。

『これはお天道様のせいじゃないわ。これは私達の不合理な社会制度のせいよ。』

琴は、感ずるところをいかめしい表情になって朗々と述べる。

『私が思うにこれは改められるものよ。男女は本来同じ人間なの。私達は希望を将来に託さなきゃあ。そこでね、蕙姉さん、あなたも心をもっと寛く持てばいいのよ、そうすればあなたの問題については、ことによるとまだ転機があるかもしれないじゃない。』

蕙は、考え抜いた表情で琴をちょっと見つめると、信じられない驚きで眼を輝かせた。そののち投げ棄てるようにあっさり苦笑して答える。

『琴妹（チンメイ） [=二十一歳の蕙が十七歳の年少者琴に対する呼称]、あなたの言うのも最もね、でも私、望みが無くなったのよ。苦海に沈もうとしている人間は、人生を逃れることはむずかしいもの。どのみち、私は自分の身を波に漂わせていこうと決めているのよ。』

## (第一部 十八章 289 頁 17 ～ 290 頁 7 行)

入念な巴金は、嫁ぐ直前の娘に対して母親が真情を吐き、許しを乞う言葉を示し、旧伝統が人々の懸命な忍耐によって辛うじて支えてゆける虚構であることを強調する。アナーキストの観察の覗く条である。

「客が帰ってから蕙の部屋はずっと静まり返っている。(中略)陳(チェン)氏 [= 蕙の実母] はそこに行き、別れ難い真情を胸に、苦勞して二十年間育て上げた娘に別れを告げる。母親はいろいろ沢山語る。娘は、頭を低れて、はい、はいと返事をする。母親のことばはごく普通のものである。(中略)彼女はねんごろに娘に対し、嫁ぎ先の鄭(ヂョン)の家に行ってからどうしたらよいかを言いつける。また、嫁となつてからの礼儀作法について娘に教える。(中略)陳氏はくりかえし一通り説明し終える、すると、彼女の声が徐々に<sup>おえつ</sup>嗚咽となってきた。蕙はげんそうに、悲しそうにわずかに母親の方をじっと見る、蕙の顔は涙の痕ですでに満たされている。母親の陳氏は娘のこの表情を見ると、急に辛くなり、もはや耐え難くなり、哭声をほとばしらせるようにして言うのだった。

『蕙(ホエイ)よ、私、本当にお前に濟まない。私、お前を鄭(ヂョン)の家に行ってもらおうとする、どうして安心できるものかね。みんなお前の父さんがむりやり決めてひどい目に合わすことになるんだ。この結婚については、私、もともと不承知だよ……。』

陳氏はそれ以上言葉が続かず、臆病な子供のように泣き出した。」

## (第一部 十八章 293 頁 10 ～ 17 行)

巴金は、黙って礼式を最後まで完うし尽くす行為を賛美するところは微塵もない。ストレートで率直な母親の娘に対する真情の吐露、こうしたことをネグレクトする行き方に真っ向から反対する。ナロードニキの思念の表出である。

『春』執筆の背景は、日中戦争の渦中である。冷淡に見える仕打ちは、次々と戦場に生命を投入し、死者、怪我人を後方に下げる、急速なる回転の手法に見まがう。事も無げに闘争に直面し続けられる総帥こそ、遂に周囲の願望の的であつてみれば、名将と崇められるのであれば、ここの二人を一概に罵倒し得ないこととなる。覚新(ジュエイシイン)的迷い、感傷は戦いの場で最も現実を離れた空想家に映じるわけである。巴金が覚新に拘泥するのは、平和とは、人々に動揺も思索も猶予も許し得る空間であることを読者に力説



したいからなのである。覺新に対する齒がゆさは、自らを苛烈な争いの中に没入させている人々の共有せざるを得ない異和感なのではないか。覺新が妻や肉親の、目の当たりにする死とは、だから、戦場において、どう形容し、賞讃されようと、費される、消耗品視される、本来生彩ある生命である。『春』はこのように読める必然性がある。

では、大家族の新派に蹉跌を齎らす元凶は如何。『春』においては高家の若主人、覺新に耐え難い悲劇を見舞う。『家』において妻を結核で亡くした彼は、忘れ形見の海臣（ハイチェン）を男手で注意深く大切に育てる。しかし、この子も六歳の時、脳炎を患い死に追いやられる。覺新は、早く当時最新の西洋医を迎えての治癒をはかるが、大家族の頭領は東洋医に拘わって、覺新の方針は手控えられる。身辺の調度、嗜好はいち早く採るものの肝心の処方とはなると連続して手控えられる。覺新がいろいろ気遣った、従姉妹の嫁入り先の夫、鄭国光（ジョン・グোগアン）も、蕙の病気の初期から面倒を見るのを手控え、骨休みを楽しみの里帰りにも、早く帰るようにと召使を送るほどである。そして、結核で死に到らしめる。叔父も義理の兄弟も、つまりは、自分の差配で強権をかざしつつ、散財を極力避け、先伸ばしする。覺新は焦慮と心配でひどい状況に追いやられる。

### Ⅲ 先達

『春』の女主人公は、高家の当権者の意向通りに、当代の儒者に嫁すコースを選ばず、邸から離脱し、四川から上海へと出立する。巴金は、淑英（シューイン）が徒らに旧伝統に投ずる女性でないことを幾つかの場面で示す。そうした自助的余裕のない者に新生へのコースは拓かれない。彼女の火照った血潮の存在を「洗髪」の場面で見せてくれる。邸の夜の花園、杜鵑花の芳ばしい春宵の中、先達者の眼前でのことである。

『琴（チン）姉さん。』

淑英は、急に嬉しそうに琴の腕を引きながら叫ぶ。

『ほら、水がなんと清々しくきれいなこと。』

『ええ。』

琴は応じつつ、驚いて淑英を見る。

『私、髪を洗おうかしら。』

『よしなさいよ。二表妹（アルビャオメイ） [=淑英のこと] もう遅いし。』

琴は穏やかに止める。

『私、うっとおしいの、ちょっと洗えばよいのよ。さいわいここは人に見られないし。』

淑英は茶目つけの有る子供のように意固地になり、そう言う。頭を二、三度揺すって手を背中に伸ばして、お下げを前に持ってきて上のリボンをほどく。

『二小姐、私が解いてさしあげましょう。』

(召使の) 翠環がこの様子を見て、慌てて申し出る。すぐに手を伸ばし、淑英のお下げをつかむ。一束、一束と解いてゆく、解きつつ心配する。

『残念ですが、梳<sup>くし</sup>や髪止めを持ってきておりません。』

そう言いつつ素早く解き終わる。淑英の鳥のような濃い黒髪が冷涼たる月光の下に完全にほどこれる、軟かい、細かい、艶やかな髪は、淑英ののほっそりとした長身にふさわしく、いよいよ輝いて見える。翠環も思わず続けて賞めそやすばかりだ。

『二小姐の髪、本当に綺麗だわ。』

琴も彼女をほめそやし、かわいく思うようなまなざしをして淑英を見つめる。(中略)

淑英は、谷川の水辺に<sup>ひざまづ</sup>跪き、頭を下に向ける、頭髮全体が水の上に垂れる、それを丁寧にもみ洗いする。(中略)

『二小姐、あなたの髪、本当に素敵だわ。』

翠環は髪をぬぐいながら羨ましそうだ。

『こんな面倒なもの、いっそのことバツサリ切ってしまうかしら。』

淑英はさしたる思慮もなく言い放つ。

『これを切るんですって。』

翠環はげんそうに尋ねた。」(第一部 二章 30 頁 10 行～ 31 頁 14 行) 琴(チイン)は淑英(シュウーイン)に好意を持つ、大家族きっての才女である。淑英が終始面倒を見てもらう学問好きの女学生である。しかし、理屈で人をリードするのみでなく、淑英の立場に同情し、強く抱擁してしまう。巴金は、ごく少ない箇所、こうした人々の結びつきをしっかりと自然に描いて見せる。深い愛情行為は男女間のみではない。当権派のしつらえる婚姻の方向を把握できそうにない、運命のいたづらを払いのけられそうにないと、淑英の泣き声が琴の耳に響くシーンの中のことである。淑英には、咯血して死んだ錢梅芬(チエン・メイフエン)の顔が二重写しになってくるよ

うに思え、琴にはそれがたまらない。女性が行動に移る感傷の局面が、巴金の筆緻で準えられている。

「淑英のすすり泣きがひっきりなしに琴の耳に送り込まれる、声は、静寂の中にはっきりと聞こえる、いよいよかすかに、いよいよ凄まじく、その中に絶望の哀愁が満ち満ちている。彼女は自分の深い所で異様な感情に動かされるのを覚えた。この感情が彼女と淑英をきつく繋ぐこととなった。ここにおいて、彼女は全てを忘れ、淑英を抱きしめた、体を淑英の方に推しやり、口を淑英の耳の辺りに近づける。彼女はほとんど淑英の髪・<sup>びん</sup>鬢や顔、頬に接吻しようとする、淑英の頭を引き寄せながら、いとおしげに囁く。

『二表妹、もう自分自身を傷めつけないで。哭いても無駄よ、哭いてばかりじゃ、あたら身体を毀すばかりよ。私と二哥（アルゴ） [= 覺民<ジュエミン>のこと] がきつと手助けしてあげるからね、私達二人、あなたの幸せをむざむざ人様に断たれることを見過ごしにできないもの。』(第一部 二章 34 頁 17 行～35 頁 5 行)

先達的位置に安住しつつ、高みに立ちつつ、人は人を<sup>みちび</sup>引きはできないことをここには示している。個人対個人の自立が際立つ現代社会には、共鳴、共感こそ、不可欠であり、共通に身を置く境域において人は相互に理解し得て、前途を選んでゆけるのだ、ということを自由を大切にする巴金は強調している。だから人は生命をいとおしみ、その拙速の断命を阻止する。

「共感と激励のことばは淑英の心に影響した、悲しむことを止めたかのように、身を起こす、頭を琴の胸の上に預けて、ハンケチで涙を拭い、冷めたように言う。

『(前略) でも、別のことを考えようとしても、今はもう間に合わないと思う。私達の家のみまり、あなたもご存知だわね。私、湖水 (= 湖水に身を投げること) のほか、次の救いの方法はない、と思うのよ。でも、私、鳴鳳 (ミンフオン) [= 覺慧<ジュエホエイ>に片思いをしながら周囲の決めた儒者の側女<sup>そばめ</sup>になる話を嫌って入水した悲運の女性] の真似はしないわよ。私、まだ人恋しいもの、私、あなた方と別れるの惜しいわ。私は、弱い人間なのね。』

話しながら幾度か谷川の水を眺めている。

『あなた、馬鹿な考えをするのはよしてちょうだい。』

琴は、じれったそうに責め、淑英をきつく抱きしめた。

『あの人達 [=大家族の当権派、淑英の父親たち] が、あなたを嫁がせようとしても、そんなに早くはできないわけだし。それまで何も起こらないわけじゃないわ。あなたがたの家の決まり、厳しいとしても、人をペテンにかけているだけだわ、あなたの方の家から三表弟（サンビャオデイ） [=覚慧のこと、ここでは上海に出ている] が外に居るし、あの人は高（ガオ）の家の人じゃないの。あの人がどうして家を逃げられたの。それに、二表哥（アルビャオゴ） [=覚民のこと] もいるし、あの人がどうして憑（フオン）の家の結婚話を断れたのかしら、どうしようもないよいよの時になれば、あなた、あの人達に学ばばいいのよ。』  
琴は熱っぽく励ます、有力な根拠が彼女の頭に湧いてきた、彼女はすらすらとそれを話し始める。」（第一部 二章 35 頁 8～17 行）

抱擁の中に相手を励ます、通り一遍でない説得の中に、琴は少しずつ淑英の中に道途を示す。大家族離脱の方向である。

#### IV 覚醒

淑英が、行動を起こすよう覚醒するのは覚民の存在あつてのことである。覚民は、大家族の中で当権派に決して妥協しない。彼は、基底の人を徹底して擁護する。召使の女性、綺霞（チーシア）を王（ワン）氏の子覚群（ジュエチュン）がからかっているのを叱り、叩くのは誰だろう、彼である。覚群は王氏にいじめられたことを訴える。王氏は本気になり、周（ジョウ）氏 [=覚新、覚民の継母] に文句をつける。覚民の立場を気にしてたしなめる兄覚新の謝罪に、覚民は全く承服しない。事の決着は、大家族の当権派、高克明（ガオー・コーミン）に持ち込まれてしまった。結末として、兄の覚新は弟覚民のことで克明になじられてしまった、と弟の前で落涙するが、覚民は始終王氏に対しても全く相手にせず、覚群の非を論じてゆくのみで、克明が兄にした仕打ちに対しても平然としていて、兄の辞讓重視の過剰を非るのみである。

覚民は大家族の中で、着々と仲間を増やし、上海の相互扶助組織に投じた弟、三男の覚慧と連絡し「均社」という社会主義 [=オーエン流の<空想的社会主義>に通底する方向を採る] 団体を省都に組織している。そこは、同じような資産家の家屋を拠点とし、中国社会に根を下ろそうとする十九世紀ロシアのナロードニキ運動の流れに接合する運動として、新聞、雑誌を発行し、学生や中学の教員、労働者の有志を募っている。また著名なロシアの活

動家でアレキサンダー二世爆殺の首謀者として処刑されたソフィア・ペリョーフスカヤ達の活動に関わる話を背景とする著名劇『夜未央（イエウエイヤン）』の上映活動を展開し、大権力の中枢、頂点を襲う直接行動主義を宣伝するアナーキズムをレアリティを以て推進しようとする活動である<sup>2</sup>。仲間と一緒にいる覚民は格別存在感がある。覚民の立場は、従って当時の現代世界の先進的思考の潮流のなかに在る。巴金が、『家』、『春』、『秋』のなかに覚民の活躍を特出して描写し、この人物が十九、二十世紀の中国社会に影響した社会思想に関与する人物である、と表明しようとするとき、これを「激流三部作」と呼称することに何ら不思議はない。「困った弟」として兄、覚新に絶えず気遣われながら、強い自己主張を持つのは、著者自身こうした立場に囚えることの反映と言ってよいのだ。そして、大家族離脱の導管設定に上海の帰着点で発信する、三男、覚慧が巴金自身をモデルにしているとすれば、中学教師として生きていった二兄は、覚民のモデルなのだと自然に了解される。覚民の旗幟が鮮明であるのは、辞讓主義の覚新の存在ゆえに極立ってくる。長兄のレスポンスイビリティを徹底して弁じてゆく巴金の作品構成、行文は、だから一貫し不思議はない。何故か。中国、世界に共通する兄弟愛の流露がそこに有るから…。淑英の覚醒を誘う禁書の上演は、覚民が仲間と企画したものだった。

『春』の主人公、淑英（シューイン）は、本作品の各場面を通じ次第に変貌してくる。そして、それは、覚民（ジュエミン）、琴（チイン）、の協助力なくして考えられぬことであるが、その他彼女自身の自発が不可欠であるのは言うまでもない。そして、それは中国が自らの二千年専制王朝体制内に培かれ、中華民国に入ってから強固に根を張り続けている伝統文化、旧套の枠内のみを契機としては決して生じ得ない力である。

巴金は、そうした主人公の覚醒の醸成を隣邦、広大な国家ロシアの文化に依拠する。誘われて琴と一緒に見た、『夜未央（イエウエイヤン）』 [=前夜] に感動し、彼女の旧殻を破ろうとする行動への思いは殊の外に高まる。

元来、『夜未央』は、上海に居る覚慧（ジュエホウェイ） [=覚民の弟] が書店で買えぬ書物の一つとして送ってきたものである。そもそも「激流三部

<sup>2</sup> 本文中、禁書、『夜未央』の上演劇に登場する主人公ソフィア・ペロフスカヤについて、巴金によれば、彼女はロシア皇帝アレクサンダー二世爆殺の首謀者として 1881 年 4 月 15 日に処刑された革命党の女性である。（拙稿「巴金の作品世界『秋』について」『地域研究』2004 年 3 月 筑波大学）

作」の一つ、『家』は、雪の降りしきる中、我が家に帰る兄弟の姿を写す情景で始まる。巴金は、そのことについて、ここ『春』の中（第一部 二十章 316頁 4～9行）で、その『家』冒頭の叙景部分の謎に解答を与え、併せて彼の初期のアナーキズムを前面に押し出す。

「これらの刊行物と小冊子の封書の表面には、いつも次のようなことばが印刷されている。『天下第一の楽しみは、雪の夜に門を閉ざして禁書を読むに過ぐるものはない。』という類いの警句である。確かにこれら情熱の有する青年は門を閉ざして、震える心でそれらの本を読むものだ。彼らが精神を集中して一字一字と読んでゆくとき、その心も煽動的な文章に魅きつけられてしまう。彼らにとって、もはや、その理論は明晰であり、合理的であり、雄弁であるところのものではない、そうした体裁を備えている必要はない。（中略）これらの書物は若い心を素早く完全に征服してしまう。若者はそこに何らの疑念もさしはさまない。彼らは将来の正義を信じ、これらの正義のために犠牲になろうとする。」『夜未央（イエウエイヤン）』はこうした雰囲気背景として、主人公淑英の前で上演される。それは覚民の省都の仲間が新たに結成した活動団体「均社（ジュンショー）」（＝平等、自由を標榜する、ナロードニキを擬した結社）の人々を登場人物に配役している。親しい身内や友人達による懸命の素人演技は、専門の劇団員よりもかえってリアリティをもって見る人の心の中に浸透してゆく。それは稚拙であればあるほど、観客の心を虜にしてしまう。不作為の演技は客一人一人を把えて離さない。巴金の作品『火』の中のパルチザン、農村工作隊が、主人公の馮文淑（フォン・ウエンシュウ）をヒロインとして、農民達に抗日の教宣をするのも同一手法と思われる。影響とはこうした感動によって生じるものであることを、巴金は淑英と琴の会話の中で入念に呈示する。ロシアの過激派団体の活動を観劇で体験する二人は、薄暗いにわか仕立ての劇場で息を凝らす、間もなく幕が開いた。やがて……。

「『明日、奴隷制度は終りになるんだわ。』

マーシャ（女召使の一人が演じている）は夢見心地につぶやく。客席の何人かが拍手する。

ワシリー（＝システムの頂上を崩壊させ一気に変革する計画を暗示する、張恵如〔ジャン・ホエイルー〕が演じている）とアンナ〔陳遅が演ずる〕が前後して外に出て行く。ソフィア（＝ヒロインで張還如〔ジャン・ホワンルーが演じている）達が中で新聞を刷り続ける。不意に、ドアの

ベルがけたたましく響く、同志アントン（黄存仁〔ホワン・ツウンレン〕）がびっくりして立ち上がる、うめき声を発する。

『あそこ……。ドアの外に。僕達の仕事は駄目になったぞ。露見したのだ。』

『あー。』

ソフィアとマーシャが声を揃えて叫ぶ。同志ダンダロー（方継舜〔ファン・ジィシュエン〕が演じている）が内側の部屋から飛び込んで来る。ピストルを取り出す。

『巡査か。よし。僕の分一発を残して五発は君らに使おう。』

彼は、また中の部屋に戻った。外でドアを叩く声が響く。マーシャがもうドアを閉めている。ソフィアとアントンは、急いで秘密の漏れぬよう通信用の地名と文書を燃やす。内側の部屋で一発の銃声、きっとダンダローの放った銃声だろう。続いて巡査長が部下五人を連れてドアを破って入って来た。……………。

『お終まいよう』

淑英がびっくりして低い声で言う。この時、階下の観客の中に、こちらを見てちょっとしたざわめきが起きた。琴も動揺した、だが、彼女は、慌てる淑英の様子を見て、思わず笑い、同情し、慰めるように言う。

『三表妹（サンビャオメイ〔＝従姉妹の三番目の妹〕）、本気にしないで。これは芝居なのよ。』

淑英は我に返って、琴を見て一息つく。』（第二部 五章 374 頁 1～12 行）

巡査と残った三人の応酬のなかに観客は一入臨場感を募らせる。こうした場面を味読することなしに、『春』の緊張に触れることは不可能だろう。

「巡査は部屋に入るなり、あちこちひっくり返し周囲を探索する、構わず三人を捉えた。巡査長はふんぞり返って全てを指揮している、ふと小さなドアを見つけるなり、近寄る、何と中から印刷機の音がする。すぐさま彼は一枚の新聞紙を取り出し、目を凝らすなり、『光明（グワンミン）〔＝地下出版物〕か』と驚いた様子。『なあんだ、お前達が＜光明＞を出しているんだ。』嘲るように言う。アントンは巡査の手をくぐり抜け相手にぶつかってゆく、だが、たやすく突き倒された。二人の巡査がアントンを捕まえて殴打する。ソフィアとマーシャは取り乱して哭きだす。彼女たちも巡査にきつく縛られてしまった。巡査長は、マーシ

ヤの前でからかうように言う。『この小娘がまだ哭きやまんのか。』  
マーシャは、悲しみ、怒り、『私たちに哭く権利がないと言うの。』  
彼はハッハと笑う。『小賢しい。お前らのような者、一体何をどうしようと言うんだ。』（女性活動家をまるで問題にしない様子）

（第二部 五章 374 頁 13 行～ 375 頁 2 行）

淑英は看劇の後、西洋の精神にいいよ目覚め、琴から遅れている旧儒家のことを説明され、旧伝統の束縛の力に対し、警戒を強める。淑英の行動力は湧き上がってきていた。以前から心配されていた従姉妹の蕙が、嫁ぎ先で結核のため亡くなる。この悲劇を自分は繰り返せない、学問への関心を高めている淑英に、陳劍雲（チェン・ジェンウイン）は積極的に英語を教えにゆく。当権者、克明（コーミン）は、二人が近づかないよう警戒を強める。春、湖に水が多くなる頃、離脱のチャンスが有る、と指摘する覚民。同行者は妹に危害を加えぬ頼れる人、として覚新が気を揉む。覚民も人選に苦慮する。そうしたなかで、自ら名乗り出る陳劍雲。覚民も納得する。琴も陳先生が同行してくださるならこれ以上のことはない、と賛成する。「三爸（サンバー） [= 克明] が探すぞ。」と案ずる覚新だが、「顔をつぶしてまでお上に届けまい。」と当権派の追撃は表立っては有り得ない、と踏む覚民であった。

（第二部 十一章）

淑英の内から湧き上がる力はまだ彼女個人のものになり切っていた。遅く戻った娘を古書を読んだあと「何時だと思う、今度遅くなったら家に入れぬぞ。」ときつく言い渡す。同時に「陳家の嫁になるのだ。」とはっきり予告する父に対し、もう一刻もこの家にとどまらないと決める淑英。出発の日も明後日に迫った。「今となつては多くを願つては駄目だ。お前の行く手こそ大切だ。」と、目的をはっきり淑英に言い渡す兄、覚民。「覚民の言葉はもっともだ。君が心配する必要はない。一切は君一人逃がしてからのことだ。何としても君を逃がす。」と決意を表明する劍雲。覚民を見る淑英の眼に涙が光った。出立の日を写す巴金の筆は早まってゆく。次々と淑英の決意を促す要件を揃えて突きつける。覚醒した彼女は動じない。運命を自分で選び取るべく、劍雲の同行する舟に身を委ねる覚悟が揺るぎなくなっていく。（第二部 十二章）

## V 出立

『春』の主題については、簡単に推究し尽くせない。しかし、何よりもこ



の春という季節は、万緑萌え出る佳節とおしなべて言い得るとしても、そこに悲感が伴うのは否めない。だから、『春』の中には、巴金により、貴重な、人の死がとりわけ極立たせられる。覚新の愛児、海臣（ハイチェン）の幼い死、従姉妹の蕙（ホエイ）の肺結核による嫁ぎ先での若い病没である。これらは、『家』、『秋』の登場人物を葬る悲運として「激流三部作」に共通する題材である。否、すべての青春の読者を魅了する傑作はこうした面を併せ持つのであり、春という季節を哄笑のうちに送り過ごし、やり過ごす一本調子はむしろ忌むべきなのである。

主人公淑英が、邸を離脱することができて、新生を掴み得たのには、琴のしっかりした抱擁が出立の成功の契機であったが、無事淑英を目的地に届ける地味で大切な役割を与えられているのが、陳剣雲である。『春』に登場する夭折、蹉跎に続く例とし彼を最も忘れ得ぬ人物として最後まで洩いてゆく。彼は、高家の家庭教師として、琴の省立高等師範学校の受験英語の面倒を見るよう、覚新から生計の足しとし世話された人物である。当面の教え子の琴には、なかば親から認められた相愛の覚民がいることを了解し、親の決めた相手に嫁がねばならぬ運命に呪縛されている琴の従姉妹淑英に心魅かれている。心の昂ぶりを抑制しつつ、自己の「愛情」を十分に表出し得ず、呑み込んでしまう好意の苦渋にあえぐ若者である。ただし、淑英に自分が犠牲になって援助する、という約束を一方的に言い渡すことはできていた。

剣雲も肺を病んでいる。彼の苦勞が徐々に体軀を蝕んだことは読む者ならずとも了解される。大家族の旧伝統は、こうした人々の善意、必死の向上心、努力によって支えられていることを巴金はこの長篇の中に示している。覚新に対して、懸命に、執拗といえるまでに淑英の離脱、新生に援助するよう懇請する。実行力のある召使翠環。才女琴が邸で呼んだ眼の不自由な音楽師の上演にうまく関与できずにいる時さりげなく琴に助力を申し出る綺霞（チーシア）の隠れた教養を巴金は示すことをためらわない<sup>3</sup>。『家』で覚慧に悲

<sup>3</sup> 綺霞に備わるのは紅樓夢の知識である。巴金と古典文学、就中、『紅樓夢』の関係については、『春』の中にも登場人物の名が表出し興味を魅く。そして、現代文学研究者の当面の関心は次のようなところに存している。「現代文学史上相当数の著名作家は古典文学の修養を成しているが、彼らは中国文化の影響についてそれを示そうとしない。（中略）しかし、もし、私達が現代作家の作品を研究する時、そうだからといって中国伝統文学が彼らに影響したことをなおざりにすれば、それは客観的とは言えない。『激流三部作』と『紅樓夢』を比較すると次のことがわかる。現代作家の中で＜最も西洋文学の影響を受けた一つの作品＞と古典文学にはやはりなお密接な関係が有ること、そしてその他の現代作家、あらゆる現代文学史と中国名品

恋をして湖水に身を投げた鳴鳳は、この綺霞より勝れており、有能を惜しまれる人物である。剣雲はこうした人物と同じく、ハイアラーキーな社会の中で知を蓄え、飛翔を夢見る有為の青年である。しかし、目的地に「愛する女<sup>ひと</sup>」を送り届けた後、絶命する。その「逃避行」の最中の剣雲の心の葛藤が如何ばかりであったか、ディレンマの中、素直な感情<sup>ひと</sup>の表出と実行を抑制する旧社会の申し子でもある彼は、他所の心の女を向う岸に渡し、悲劇の人生を終える、むろん、巴金はそこは語らない。

### 結語に代えて

巴金が直面していたのは、刻々と変動する日中戦争の中国であり、中国人の運命であった。不思議に思うのは、高覺新（ガオ・ジュエシイン）の強勁さである。妻や子、大切に思う従姉妹の蕙を亡くして相当な衝撃を受け、再起不能と思われる状況に追い込まれても、高（ガオ）の邸に静かに立っている。弟の新知識派は、ナロードニキの流れを汲む劇団、相互扶助団体に依り、高家の経営を長兄に委ねて乾いた理性で生き続け得よう。むろん覺新を守る経済的基盤は、周伯涛（ジョウ・ボータオ）を始めとする高克明（ガオ・コーミン）、高克安（ガオ・コーアン）、高克定（ガオ・コーディン）の三人の兄弟である、舅父、当権派であっても共通して、四川の各地に所有する田畑から供給される小作料であり、市街（＝成都と考えられる）に開設しているマーケットの賃貸料、あるいは直接経営店舗の利益、そして従来蓄えた資産を投じて運用する株券である。

高家に加わる打撃は、自然災害、盗賊の横行による小作料収入の不足、市街地の不況、おそらくは大変動と裏合わせになっている、戦局の変化からもたらされる株式の下落などである。始終経済の稼働と不可分の行動の中にいる当権派は必死になって応じている人々である。実働隊である。覺新もこうした面に取り組んでいる姿が、作品のあちこちに垣間見られる。覺新が舅父達を徹底的に難詰し得ぬもどかしさは、彼が経営の主翼に絡んでいる所為に依る。

では、覺新の弟妹や妻子に対する共感、理解は何に由るのか。私は、ここ

---

文学遺産との関係は、進んで研究する価値を有する、ということが。」（辜也平『激流三部曲』と『紅樓夢』異同論』1988年1月『巴金研究論文集』重慶出版社の中、本文180頁参照）

一言付け加えれば、情報化社会の今日としては、古典と現代を各個別に枠組に拘わっていたのでは、解釈が難しいのではないかと懸念される。

に巴金の儒家観が表出しているとする。なるほど、彼は、とりわけ覚民の口を借りてその辞讓主義を手ひどくなじる。しかし、覺新はその態度を改めようとしな。というより、辞讓の堅持こそが覺新の背骨となつて、彼を『春』の中で一貫せしめている。鬭争に飛び込みその渦中に泳じている人々は、そうした彼を不徹底とする。しかし、覺新は該博な教養を培かつており、視野を広く採り、弟の過激派への心酔を心配しながら、これを見守っている。こうした、巴金の儒家観は、おそらくは中国の儒者の把え方に因り生じたものであろう。

不思議なことがもう一つある。覺新は、事の成り行きを省察する見識を有しながら、打つ手が遅れ次々と身内に不幸を招来することである。読者の多くがこのことに焦ら立ち、立腹し、不幸に見舞われた人々に同情共感し、あるいは落涙し、あるいは、ことによると安堵し、長篇と結末までつきあうことになる。覺新は、こうした所作を読者に生じる責任を負荷として有する。彼は策を弄しない、およそ、タクティックスと無縁な人物である。そして、術策を事とせず、多数に頼まない、こうしたスタンスを、巴金は中国の儒家の特質と観じていよう。だから、読者は関心を、彼、および彼の周辺に抱きつつ、次作、たとえば、『秋』に繋ぎそれを待つことになる。